

## 令和元年度「知」の集積と活用 の場 評価委員会議事要旨

### 1. 開催日時及び場所

- (1) 開催日時 令和2年2月25日(火) 10:30~12:30
- (2) 開催場所 農林水産省 4階 第2特別会議室

### 2. 委員数及び出席委員数

- (1) 委員数 5名

- (2) 出席委員数 4名

### 3. 出席者の氏名(敬称略)

評価委員: 大滝義博、近藤孔明、北岡康夫、西片奈保子

農林水産省 農林水産技術会議事務局:

菱沼局長、福島研究推進課長、久納産学連携室長、佐藤産学連携  
担当専門官、小林研究専門官、山本課長補佐

### 4. 議事要旨

#### 【開会】

農林水産省による開会挨拶の後、事務局(農林水産省研究推進課産学連携室)から評価委員会開催要領(資料1)の内容について説明を行った。

#### 【座長の選出】

評価委員会開催要領に基づき、評価委員会の座長として、株式会社バイオフロンティアパートナーズ 代表取締役社長 大滝義博氏を選出した。

#### 【運営細則について】

開催要領の運営細則案について座長の進行の下、事務局から説明を行い、原案どおり承認された。

#### 【議事1 令和元年度の活動に関する報告及びレビューについて】

事務局から、令和元年度の活動に関する報告及びレビュー(資料2~7)について説明した後、評価委員、運営委員による質疑・意見交換を行った。評価委員及び運営委員からの意見等の概要は以下のとおり。

- ・ 昨年、評価委員会での指摘に対し真摯にきっちりと対応。運営体制もシェイプアップし、全体的にブランドイメージが上がった印象を受けた。

- 研究開発プラットフォーム（以下「PF」）のうち事業化フェーズ、産業化フェーズに進んでいる割合も高いと感じる。
- 「知」の集積と活用の中による研究開発モデル事業（以下「モデル事業」）が始まって、4年が経つ。これからの数年間で製品化するためには何が重要なかが一番重要なところ。おのおのプロジェクトが今どのポジションまでできているのかチェックし、事業化にはどのような支援を行えばよいか考えることが必要。日本の強みになるような製品の開発を行って欲しい。
- 沢山の研究シーズや成果が出てくると、そろそろファンドや金融セクターといった資金を集めることを考えることも必要。特にファンドについては、海外ファンドを入れるかは、別の議論になるが、ぜひ次年度以降の課題にしていきたい。
- PF連携については、研究領域毎との連携もあるが、横串の連携を考えてもよい。
- PFは、多業種が入っていることが重要。その中で、生産者を取り込んでいく力があることは重要であり、この観点もPFの評価とすべき。
- 産学連携が目指す出口は次の3通りあると考えている。①中小企業型のベンチャーであり、それがあって、日本や地域に非常に意味があるもの、②スタートアップに金融機関の資金が入りグローバルな展開を目指すもの、③ジョイントベンチャーの形で大企業の傘下に入るものである。各PFが、どこを目指すのかということは、そろそろ決めてもいい時期に来ているのではないかと。
- 目指す方向を決める際には、どの方向が相応しいのか判断できる人材が必要。また、インキュベーション（新しいビジネスを育てる）の手伝いをする人材が必要。PFのプロデューサーだけでなく、実働として、コーディネーターをしていく人材が必要であり非常に重要。
- 日本にとっては既存の技術でもグローバルな視点から見ると必要とされる技術がある。そういったことを目利きする人の力を借りて方向性を検討すべき。そのような人をどうやって巻き込むのかが、次の大きな視点である。
- PFの中にも技術の目利きが出来ると、課題に適した事業を選んで応募できるようになる。
- PFには、PFを運営するプロデューサーと、研究成果のイグジットを目指す人（実業家や経営者）の二人が必要。外部から人をもってくることも、スタートアップ型に関しては重要ではないか。
- 商社や金融機関からの理解を得るには、最終目標に対して、どのフェーズ

にあるのかを示すことが必要。TRL（技術成熟度レベル）を尺度に入れると、外部からの協力を得る際の一つの指標となる。

- 各PFの報告書にある人生相談型、コンビニ型、化粧品売り場型について、外から入って来た人は、具体的にイメージできる人は少ない。例えば「研究者がいる」、「販売やマーケティングに対する人がいる」など、そのPFは、どのような機能を持っているのか、どのような技術があるのかということがわかるような取組が必要。
- 研究コンソーシアム（以下「コンソ」）の研究成果を事業化するためには、厳しいコメントを言うベンチャーキャピタル（以下「VC」）と、PFの代表、それを仲介するためのインキュベーターといわれる人材が必要。この三つの関係性がなければ、商品化・事業化は難しい。
- コンソの出口は、経験者(商社等)の知恵を借りると、マーケティングが進んで、実際に製品化するという事例がある。

#### 【議事2 令和元年度の活動に対する評価について】

- 活動4年目の段階で、これだけ多くの人数が集まってPFやコンソが組成されたことは評価できる。多くの人が集まらなないと、いいものが出てこない。多ければ多いほど、その中には光った玉がある。
- 他分野との連携では、農学部以外は、農林水産にどんな課題があるのかほぼ知らない状態。また工学系等が、一方的に農林水産の課題を聞いても、何を協力したらいいのかわからない場合がある。他業種の知見を農林水産に取り込んでいくためには、農学の研究者が他分野の知見や情報を知る機会を作る事も必要。
- 農林水産のこの分野に入ると、儲かるんだというイメージが重要。若い人たちは、そういう分野に入ってこようとする。明るい将来が見えて、儲かるというのは一つのキーワード。そういう見せ方がオープンイノベーションには重要。
- 『「知」の集積と活用場の場』の趣旨を大学の先生に理解させるというのが非常に難しい。中には、「イノベーション創出強化研究推進事業」の審査に有利になるとの理解から、PFを立ち上げるという例もある。評価項目のうち「PFは「知」の集積と活用場の場の趣旨を理解し活動しているか」が、一番、大事ではないかと思う。
- 農業では、農地法など大学がわかっていない法制度もある。わからない中で研究を進めてしまうと、結局うまくいかない。そのあたりが中小企業での研究開発と相当違うと感じている。

- 研究成果を、実際に社会実装するときにはやはりお金の力が要る。有望な研究成果には、金融や商社のセクターが支援するチャンスを作ることも必要。
- 最近の経済学では、事業への投資ではなく、人間の環境や健康や心に対する投資、生き方の投資ということが言われる。SDGsの話もあるが、事業化というのはお金の話だけではなくて、人の幸せに対して貢献できるという点も最終的に重要。
- 『「知」の集積と活用場』から、次々といいものを、国内だけでなく海外にも出していくことを目指していただきたい。そういう取組とするためには何が足りなのかという観点でも見ていただきたい。
- 様々な分野の方々から、色々な意見を聞くということは重要である。事務局でもこれまでと違った異分野の方々の意見を入れて、農林水産業に応用していただきたい。

(以上)